

岩波・横根 界限史蹟

本件対象エリアを右図とし、特徴的な史蹟は、石行寺境内、「さんきょう院」跡、横根村内石碑群、横根堰趣意碑、古峯神社であろうが、本書はそれを除き、従来余り目立たなかった日陰の史蹟に焦点を当てる。

以下は、

第一章 岩波大橋広場と寺下の石碑群

第一章 「さんきょう院」古道

第三章 岩波・横根-日陰の史蹟マップ

第四章 横断的共通性視点からの切り口の構成とする。



I部に記述したとおり、「さんきょう院古道」について客観的な国土地理院地形図に科学的GPSトラックログをトレースし、「滝山歴史マップ」に記載の「さんきょう院」に至る道を特定したことは、従来、瀧山郷土史研究会においては何も（誰も）成されなかったことである、すなわち、誰も文書化して公開した人はいなかったことであり、もちろん、「瀧山の歴史」にも一片たりとも載っていないものである。しかし、この度、3人のチームワークでこのように至ったことにより、滝山地区の歴史に新たな1頁を付加したことになる。

また、II部は極僅かの名称のみは「瀧山の歴史」に記述されているが、国土地理院地形図にプロットし、具体的状況について現地写真を以って整理したのも初めてのものと自負している。

本書を纏めるに当たっては横根、河合卓^{たかし}さんからの証言と、たくさんのご助言やご教示を賜わり、また、ルート調査に当っては岩波、伊藤利博さんの同行を賜わり整理したものである。なお、文責を担う大沼の私見を混交させているので少し解釈が違うかもしれないがご容赦賜りたい。

私の過去を遡って見たら2012(H24)年4月には、II部における「⑤二つの墓石」以外は巡回・調査していたことが判明したが、その時はこのような整理は行っていなかったものである。

第一章 岩波大橋広場と寺下の石碑群

1. 岩波大橋広場の石碑群

対象エリアは図-1のとおり。

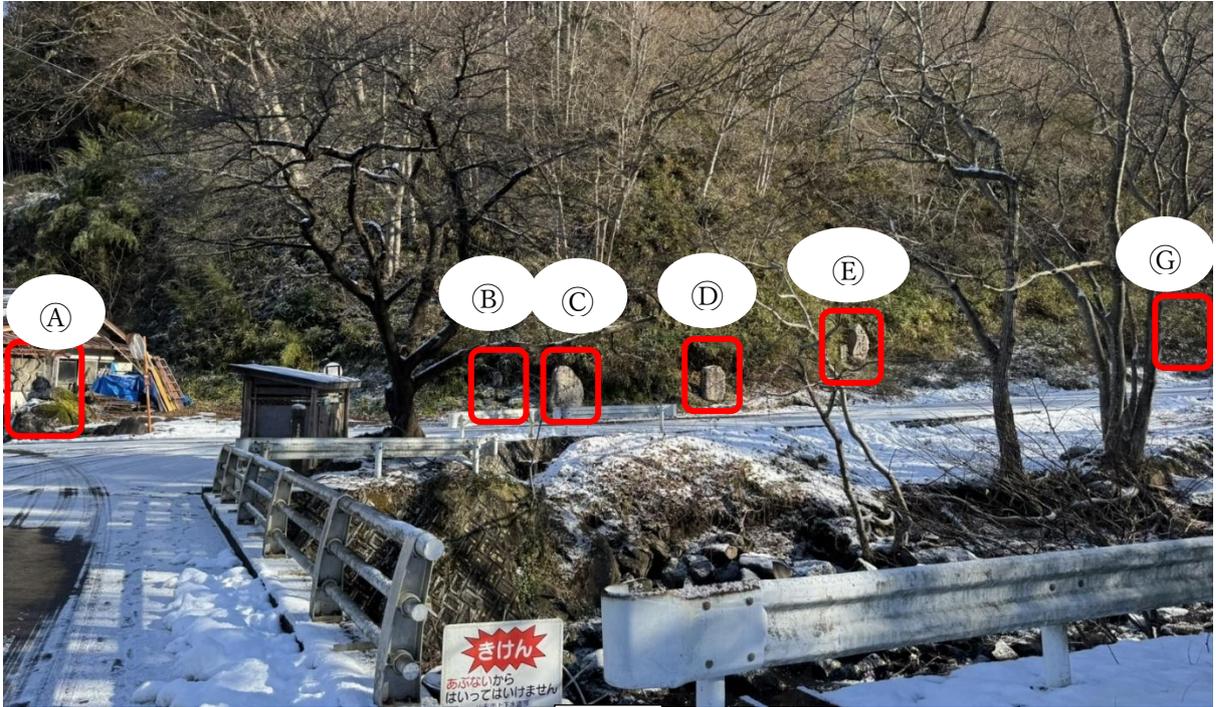


図-1

①姥神様；南面／図-2

姥像安置の意味合いは諸説あって、女人禁制と結び付ける短兵急な俗説も流布しているが、ここは、昔は天台宗新福山石行寺の寺下域であり、同寺境内には最上三十三観音霊場の七番札所岩波観音が存立していることから、女人禁制を意味するものではなく、聖俗結界、ここより下手は俗域、上手は聖域——ここでは仏域結界、すなわち、この姥像は神域結界の鳥居に相当するものと解釈している。石塔は阿弥陀如来の梵字（キリーク）を冠している。姥像本体には何も刻されていないが、後方の石塔「百萬遍供養塔」と一体なものとされており、すると、明和七(1770)庚寅年三月に伊藤定皓一人が寄進（施主）したということになる。

	西面		南面	
幅 27cm × 高 97cm × 奥行 27cm	<p>明和七<small>(1770)</small>庚寅年三月吉 伊藤定皓</p>	<p>奉唱百萬遍供養塔</p>		幅 57cm × 高 90cm × 奥行 35cm

図-2

ところで、当域は天台宗石行寺を中枢基点とした修験道竜山信仰が隆盛した歴史を持つが、その位置関係は図-3のとおりである。麓の入山口（今となっては西藏王牧場）を基点に周回出来るが、途中の2個所に姥像が鎮座している。これは女人禁制結界だとされて来た。

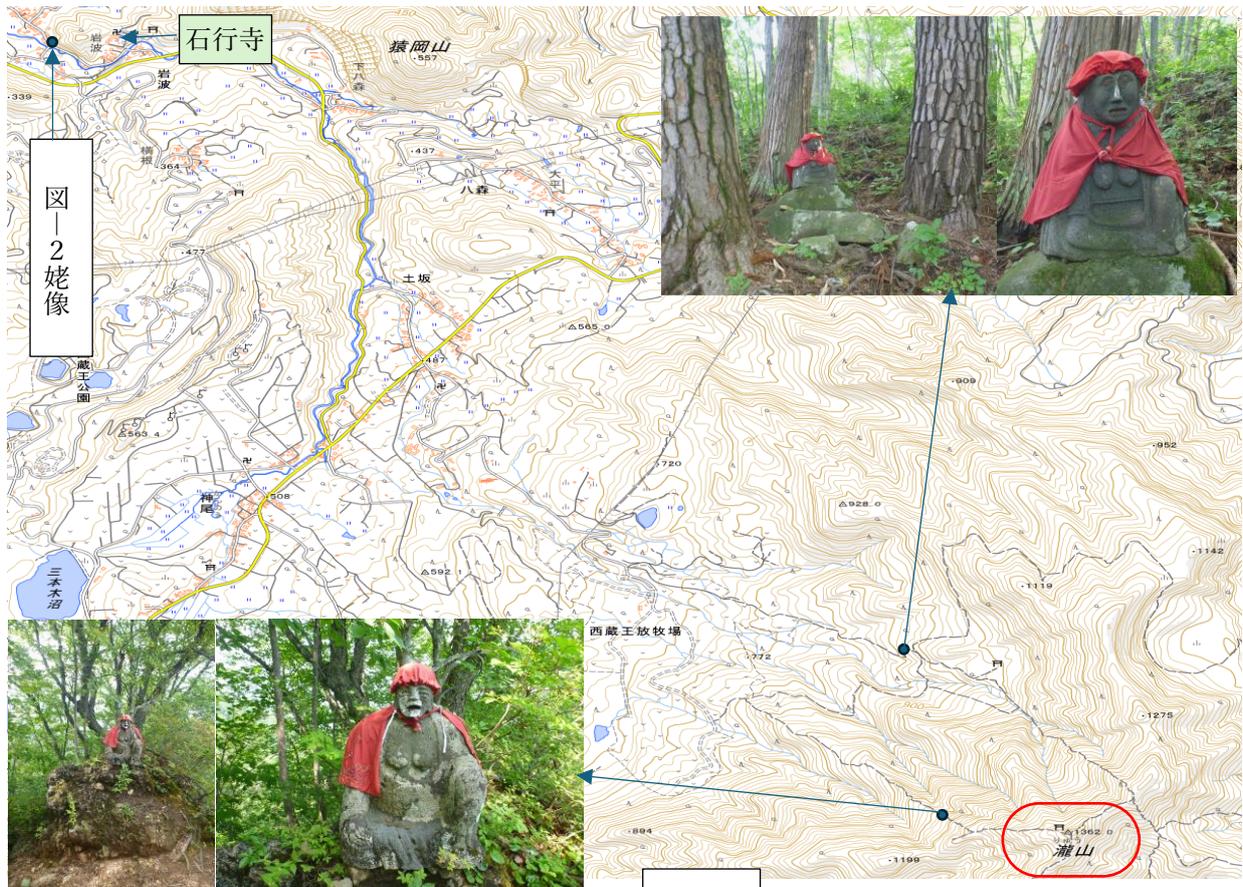


図-3

⑧馬頭観世音；南面／図-4

その他の刻字はなし。ところで、手前に右側のような台座が残っているが、何か乗っていた気がするが、周囲にはそれらしきものはない。



図-4

©蔵王・龍山供養塔；南面

頭部に図-5aの梵字を冠しており、全体は図-6のとおりである。

ところで、滝山郷土史研究会「滝山史談第二十三号（令和2年3月1日発行）」に、この碑の梵字は青面金剛しょうめんこんごうであるから庚申塔である、と記述している。がしかし、ネットで調べると、青面金剛の梵字は、ほとんど・大方は図-5bの図柄を指している。当地のものは同図aのとおりである。一部では確かに同図aも青面金剛の梵字という処もあり、どちらもOKなのだろうか。しかし、このものにおいては二つの山名と「供養」を刻していることから、講中が蔵王山および龍山の参詣登山の成就を記念したものであり、つまり、庚申塔ではなく、いわゆる「信仰碑」ではないかと私は考える。その上で、直来の集会を庚申講の集まりと合わせたものだというのであれば、それはそれで是とする。

蔵王権現 (青面金剛)	蔵王権現 青面金剛
	
当地の梵字 図(表)-5a	----- 図(表)-5b

南面



幅 140cm × 高 170 × 奥行 45cm


 瀧 蔵
 山 王
 供 養
 世 話 人
 伊 東 藤 十 郎
 (伊 藤 藤 十 郎)
 當 村 中
 文 政 二 年 己 卯 閏 四 月 吉 日
 (1819)

図-6

①三社託宣碑；南面／図－7

この碑の面白いのは、裏側は傾斜面の土で下の文字は隠されているが、明らかに「金毘羅」（地際に羅の部首の“𠂔”が見える）と読み取れる。実際は「金毘羅山」あるいは「金毘羅」と刻字されているのかもしれない。また、裏側左下地際に「願主」らしき文字も見えるが、その他は風化著しく判読出来ない。したがって、この石碑は表裏の二つの顔を持っていることになる。このような思いがけないものに出会うと、神仏のご加護の賜物なのかと嬉しくなる。

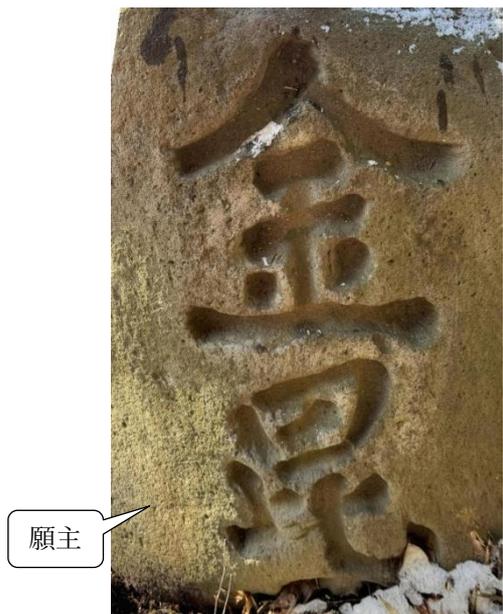
「三社託宣」については珍しいが他にもある。るる記述したいことがあり別記する。

左側面

南面

北面（後）

(1226)
文政九戌歳八月吉日



幅 86cm × 高 138cm × 奥行 30cm

図－7

⑤・⑥湯殿山碑；南面／図－8

当域の湯殿山碑については、横根集落のものを含めて別記する。一つ、注釈を加えておくと、前記図－4の台座の四角に彫った大きさ（同図の上向き↑）と図－8左⑤碑の底面大きさがほぼ一致することからは、この碑が乗っていたのか???



図－8 a

正面銘文、および、向かって右側面の建立年刻字には朱色弁柄が明瞭に残存している。

幅 32cm
×
高 84cm
×
奥行 33cm



(1779) 安永八巳亥歳 八月八日



左側面

(1865) 慶応元年乙丑年八月八日
天 慶 乙 丑 年 八 月 八 日
下 元 泰 平 国 家 安 全
穀 成 就 村 内 安 全
五 成 就 村 内 安 全



幅 100cm × 高 167 × 奥行 45cm



正面左下

観 溪 拜 書 □ □

山形市七日亭 (町) 石工 (鏡) 門兵衛



金種と 関係者 複数氏名
伊藤源吉 伊藤權左工門 佐藤兵右工門 伊藤救之助



當 伊藤清左門 伊藤忠右工門 伊藤忠右工門 伊藤忠右工門 伊藤忠右工門

裏 (北側：山側) 面

図-8b

⑨「南無妙法蓮華經」碑；南面／図－9

これ以外の刻字はなし。「南無妙法蓮華經」は、今は日蓮宗や法華宗などの法華經を聖典とする宗派で唱えられるお題目で、「法華經の教えに皈依をする」という意味である。フリー百科事典『ウィキペディア』によれば、615年には聖徳太子が著したとされる『法華義疏』の中に「妙法蓮華經（法華經）」が紹介されている。聖徳太子以来、日本における仏教の重要な經典のひとつであると同時に、鎮護国家の観点から、特に日本には縁の深い經典として一般に考えられてきた。多くの天皇も法華經を称える歌を残しているとされている。



幅 47cm × 高 83 × 奥行 37cm

図－9

2. (石行寺) 寺下の碑

(1) 「天神様」

図－10の場所（石行寺の土地）にある天神様像のこと。天神と言えは菅原道真公（天神様）のこと、その容姿は図－11のとおりである。図－12a 写真中の白線（注：原文中は白線とあるが、図12aの存在は本文で説明されていない）の方向に明瞭ではないが、道型があり100mほどの所に小さな堂宇（石祠）が祀られている。その様子は図－12b、図－13のとおりで、写真のとおり（注：原文中は写真のとおりとあるが、図12b, 13の存在は本文で説明されていない）の一目、全体が束帯姿の神主（神職）のように見える。頭部に烏帽子を被り、胸元に両手で笏（しやく）を持ち、左肩後方に神剣が見え、着衣などの全体像容からは「天神様」である。屋根部側面に紋の彫刻がある、「梅鉢」の家紋である。梅鉢紋は、花卉をそれぞれ独立した円で表現して梅の花を描き、全国の多くの天満宮で神紋とされているという。



図－10



<https://www.dazaifutenmangu.or.jp/>

図-11

「天神様」とは、周知のとおりで、平安時代の学者・政治家で、菅原道真（845～903年）を指す、その境遇（不遇）を踏まえて神格化が図られ、学問や書、和歌などに優れていたことから「学問の神様」として知られている。ここでは詳細は割愛する。

基礎と屋根部の間は、コンクリート製となっており、明らかに近年（昭和以降か？）取り換えたと推定される。



図-12a



図-12b



南面(左)

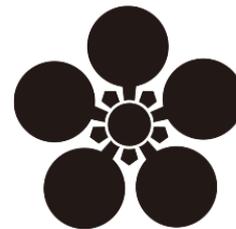
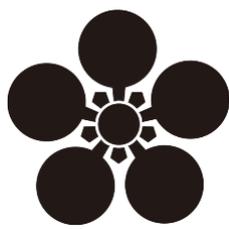
東面(前)

北面(右)

西面(後)



図-13a



(台座から上の寸法) 幅 cm×高さ cm×奥行 cm

図-13b

一つ疑問がある。なぜ、人目に付かない場所に建立したのかである。

例えば山肌の樹木が一切無いと仮定しても、山肌が邪魔をして下の道路からは見えない。実は、図-14aのとおり範囲においては、昔は今の道よりも上部にあったのではないかと推定するが、それにしても古い道型は同図bのとおりUターンしており、その道からでも祠は見えなかったのではないか。なぜ、そのような場所に置いたのかは謎である。しかし、一つのヒントがある。標高300mのこの山は楯(盾)が設置されていた(楯山と称したとされる)ということからは、祠の先にも山頂に向けて道が続いており、この石祠建立の頃は子供達の身体鍛錬、遊び場フィールドになっていたのではないか。



図-14a



図-14b

(2)「湯殿山」碑

3基目は、図-15のとおりで、岩波は石行寺下の丹羽家宅地内に存置の湯殿山碑である。以前は接する道路にあったが、拡張する時に宅地内に移設したものであるという。その他の刻字は見当たらない。

個人宅内なので無断立入りは厳禁である。

幅 90cm
×
高 160cm
×
奥行 55cm



辰
七
月
吉
祥
日

寶曆十庚天
(1760)

図-15

第二章 「さんきょう院」 古道

『滝山歴史マップ』掲載の図-16aを参照、2024(R6)年11月9日(土)午後、伊藤さんと大沼は、同図中「ここ1」の「さんきょう院」跡まで行って来た、伊藤さんは初めてだが私は何回も行っている。全体の状況は以前と変わりはない。



図-16a

同図中「ここ2」のルートが気になっていたことから2024(R6)年11月25日(月)午後、伊藤さんと大沼は探査して来た。さらに大沼は翌日26日(火)、同ルートの道普請(道に接近していたツル除去)を兼ねて再調査して来た。その時のGPSトラックログを整理したのが次頁図-16bのとおりである。

現地を以下に説明して行く。入り口は図-17 県道53号線上岩波橋を南に入る。途中、図-18のとおり、道の土留め石垣がしっかり残っている。その先田んぼに出て開けるが、東側端の畦畔を少し登って



図-17/P1



図-18/P2



図-19/P3

行くと、図-19のとおり NTT 通信柱の左側に開放された道が通っている。

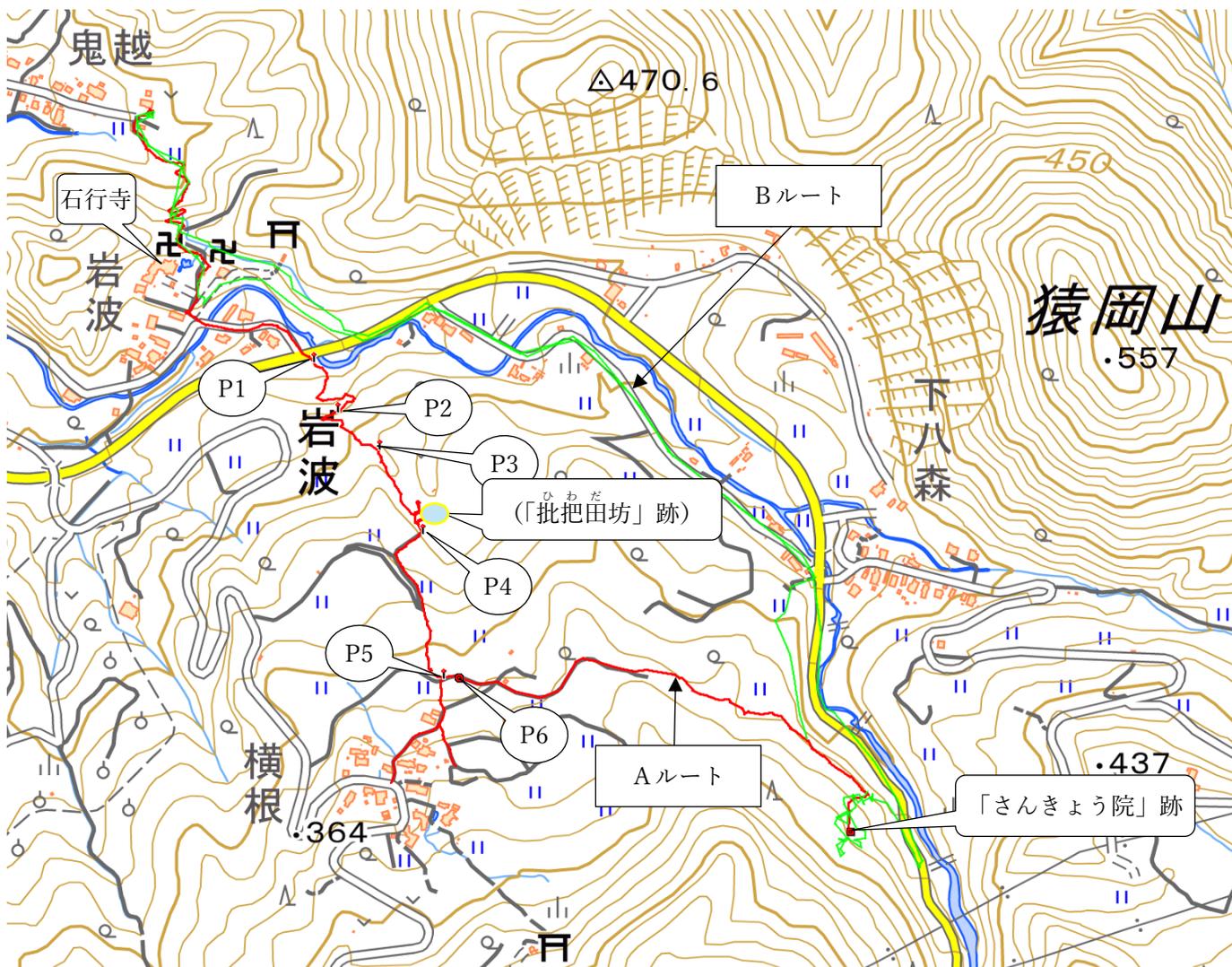


図-16b

先に進み P4(図-20)において右(南方角)に直角に曲がる。さらに進むと P5 において農作業道に合流し、直進方向は図-21 のとおり横根集落に入って行く。左折方向は図-22 のとおりで、「さんきょう院」跡に至る。



図-20/P4



図-21/P5



図-22/P5

ところで、25日(月)、現地^{たかし}で河合卓さんと遭遇した。次の点を伺った。

○横根集落から石行寺に至るこの道——集落→P5→・・・→P1→石行寺は、「寺道^{てらみち}」と称した。

○P5 から P6(山神碑)を經由するこの農作業道は、その先に進むと「さんきょう院」に至る古道であった。

○P4 の場所には、「瀧山の歴史」に登場するが竜山信仰に係る「批把田坊」の跡があって、湿地(池) 近くに五輪塔の一部が残っていたが、一時持ち上がった建物建設との関係で埋め立ててしまった。

すると、図-16 に戻って、「ここ2」の謎が解けたことになる、つまり、同図のとおりルートが今に残存していることなる。

図-23 を参照、石行寺から「さんきょう院」に至るルートには、横根を經由しないBルート（滝山歴史マップにおいては土坂古道）もあったようだが、今となっては、Aルートと比較しどちらが古いのかの真実は誰にも証明出来ない。そうであれば、河合卓^{たかし}さんからの証言と「瀧山歴史のマップ」との整合性からは、Aルートを「さんきょう院」に至る古道筋「さんきょう院古道」と称することとする。

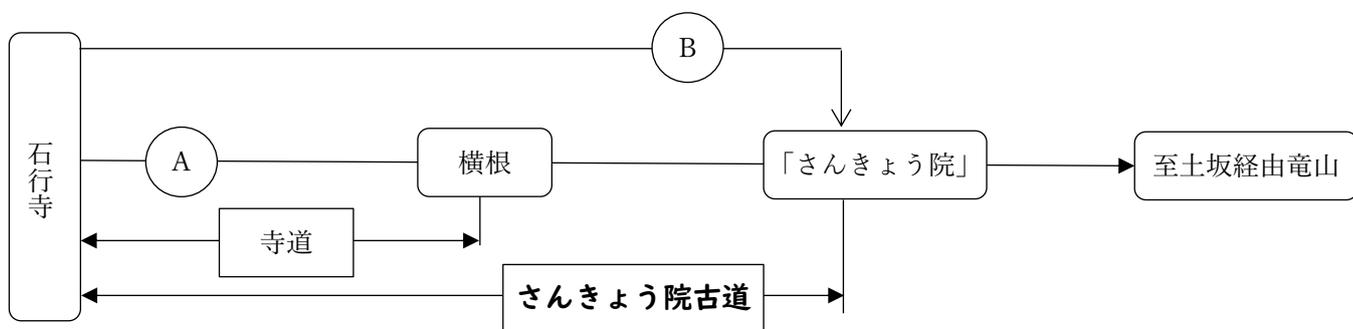


図-23

ところで、別記-「さんきょう院-跡地・遺構」の探査報告書（前編）に記述したとおり、瀧山地区歴史関係資料には「さんきょう」の漢字が図-24 のとおりに5通りが出て来る。「目的合理性」においてはどれも屁理屈があるので、一方に組みせず『ひらがな』表記にすべきと思う。

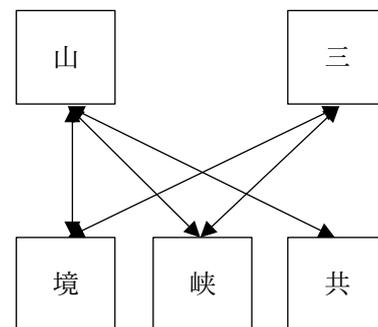


図-24

2024(R6)年 12月 20日 (金) 10時 50分~11時 05分、「さんきょう院」地主の岩波伊藤権左衛門の奥様「こう」さんを訪ねて、「その土地に何か食器の欠片などが残存していないか、調べさせて貰う、重機を入れたりするものではない、一言^{ことわり}理を言いに来た。」とお願いした処、「んだが、んだが、何か出るといいな。」という了解の返事を貰った。

第三章 岩波・横根―日陰の史蹟マップ



①



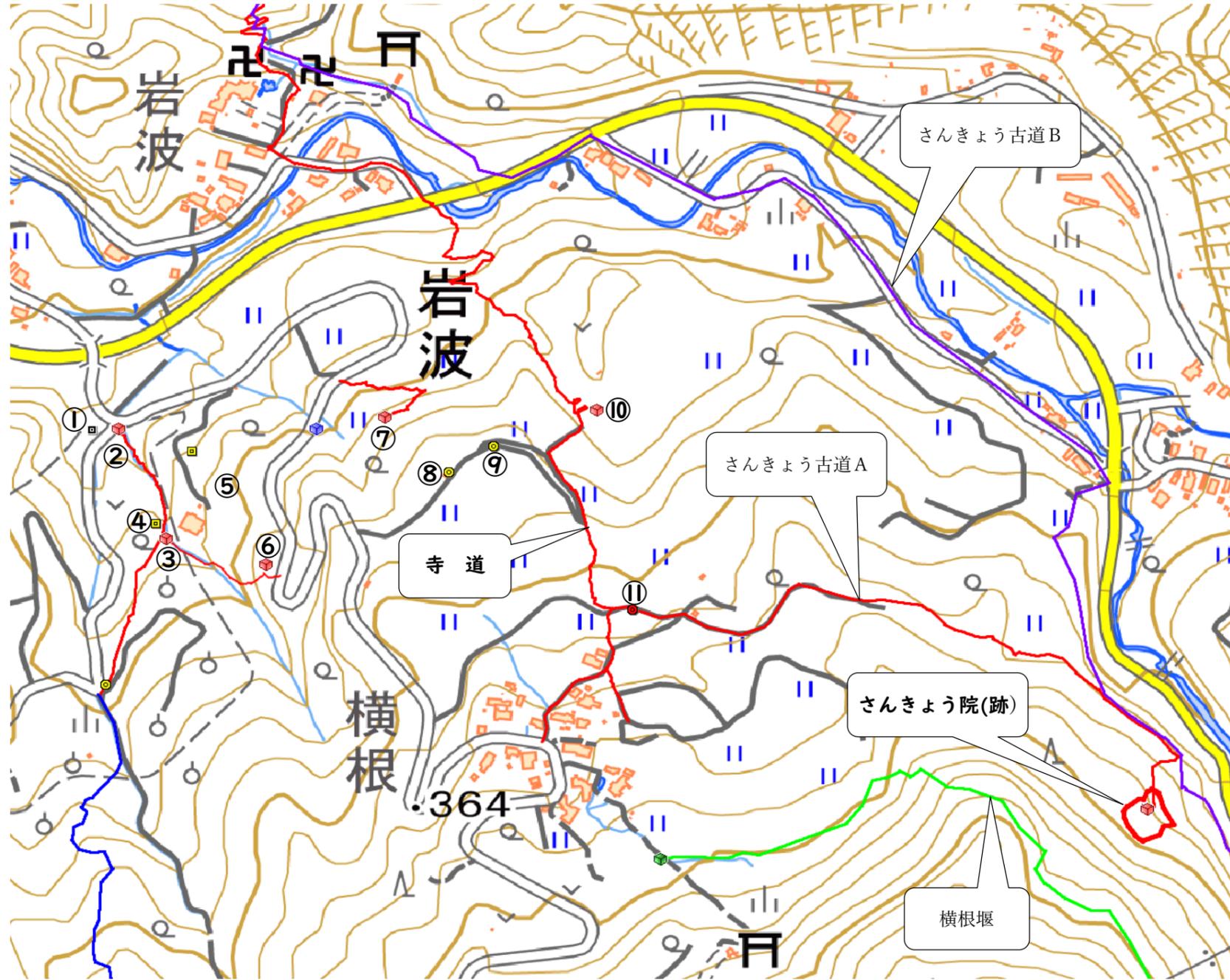
②



③



④



⑪



⑩



⑨



⑤



⑥



⑦



⑧

①昔、岩波の火葬場／図-25

現況は以下写真のとおりである。河合さんによると地元にはこの周辺地を「ごさまえ」という呼称（発音）が伝承されて来たという。それではどのような文字が当てられて、どんな意味なのか調べてみた。「ご」は「御」なのではないのか、「まえ」は「前」なのではないかと想像した、さてさて「さ」は何か。



図-25

そこで火葬場の古語を調べたら「三昧場」であることが分かったので、その冒頭文字「さ」から来たのではないかと直観した。仏語の「三昧」は心を一つの対象に集中して動揺しない状態、雑念を去り没入した精神状態をいうが、要は死者があのお世で悟りを開いて成仏せしめるという意味合いを込めた呼称であろう。故に「三昧場」とは死者の冥福を祈るため、墓の近くに僧が籠るために設けたお堂を指すとされる。よって、「ごさまえ」は御三昧場の地、“さんまえ”は“さんまい”の発音揺れであろう。

②追分碑と追分地藏尊

現況は図-26のとおりである。



図-26a



図-26b

その1；追分碑のこと。追分碑は図-27のとおりである。追分碑『みちしるべ』石柱（右 龍山左古峰神社）は、現在位置よりもう少し（約120m）上流（南）側の分岐点にあったが後記する。同石柱の中央下部の「榮玉堂」——山形市旅籠町2丁目にある江戸時代末期創業の和菓子店——は同碑の寄進者である。この地点から横根集落へ至る今の市道が開削整備されたことにより、古道の使用意義はなくな

るだろうから追分碑を衆目に触れるようここに昭和 38（1963）年移転し、史蹟として保存することにしたという。

（向かって左側・東面）
明治四十二年三月十三日建立



図-27a



図-27b



その 2；図-28 地蔵尊のこと。お地藏様（追分地蔵尊）は元々この位置にあったが元名称は明確でないという。

正面左側には何やら刻字されているようだが風化著しく判読出来ないこと、また名前が伝わっていなかったことと合わせ平成 10（1998）年「追分地蔵尊」と命名した。（元々なぜこの位置なのか、私が思うに、道はここからいよいよ山道に入っていくという場所だったと想像している。この地は道における一つの区切り点、山・里境界ラインだったのだろう。）

命名に合わせて当該年に、関係者が集まり石行寺の佐藤亮寛住職導師のもと開眼供養祭（通称の芯入れ）を行った。



図-28a

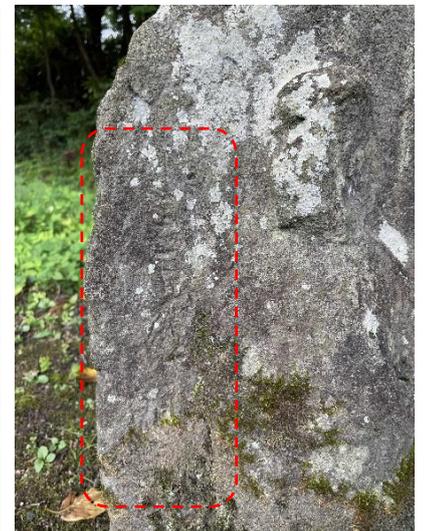
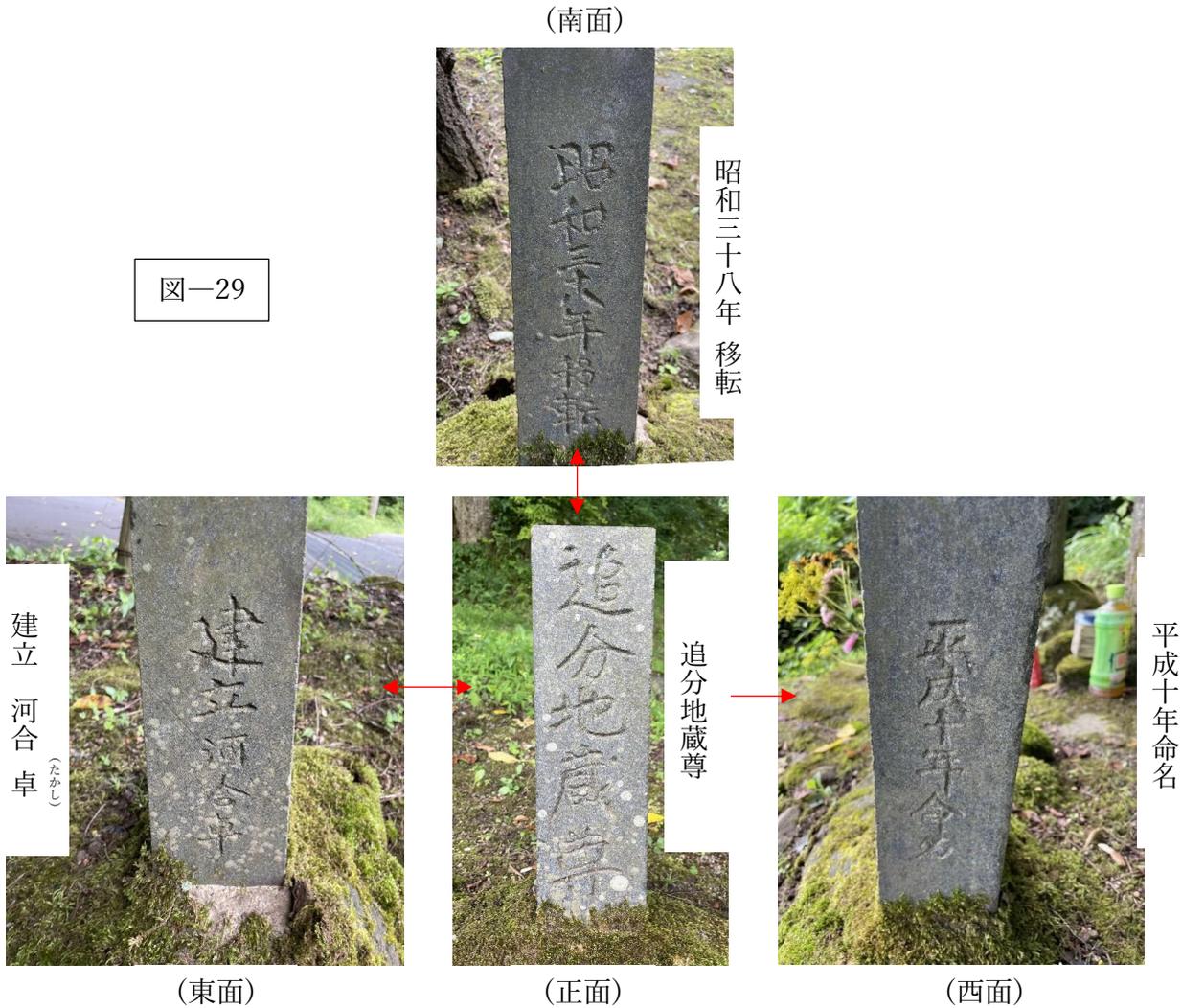


図-28b

その 3；図-29 のとおりの「追分地蔵尊」の案内柱は、前記を記念して横根集落の河合卓^{たかし}さんが寄進奉納したものである。四面の刻字は同図のとおり。

その 4；この追分の地にある桜（ソメイヨシノ）は、今の上皇様夫妻（明仁上皇と美智子上皇后）が昭和 34（1959）年 4 月 10 日に結婚されたが、そのご成婚を記念して植樹したものである。

図-29



その5；図-30aは2012(H24)年12月18日(火)、たまたま通り掛かった時に撮影したもの。祭主とは河合卓さん、同図bのとおり毎年掲示されている。2021(R3)年8月21日(土)に私はまたあらためてお参りしたが、お賽銭がそれなりの額が入っていた。本追分の右手道路は自然公園「悠創の丘」に至る散歩コースにもなっており、ここで拝んでいた人を何人か見ている。

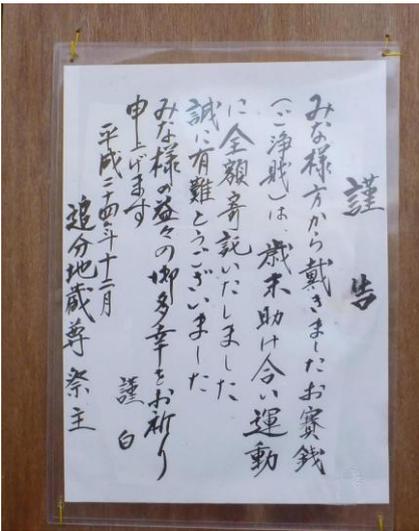


図-30a



図-30b

前記のとおり「追分地藏尊」左側には刻字がある
 気がするとしたものの、そこで終わっていたが、
 2024(R6)年12月23日(月)午前、粉雪が降ったの
 で行って見た。図-31のとおりに碑文を解読した、
 がしかし、建立年の刻字は見当たらない。

図-32参照、ここで、面白いのは図-3のみちし
 るべと比較照合すると、それは「右 龍山」である
 が、地藏尊には「右 かの」で、竜山は『左』と
 いうことになる。同じ竜山に行くのに、右回りであ
 るうが、左回りであろうが、いずれにしても、竜山
 (龍山)に行き着くということである。どちらも正
 しいものであるが、現在、同じ場所に併存させるに
 おいては、一見、同じ竜山に行くのに、右と左の誘
 導案内では矛盾性を感じない訳ではないが、あるい
 は、初めての人のにとっては迷い・不安を惹起しかね
 ないが、それぞれの建立者の意図が反映されたもの
 であろうから問題はないのである。

関連して、余談であるが、別添——(「高
 清水通り 調査報告書」ダイジェスト)[9]表
 と裏、裏と表——を添付する。

また、例えば、「7倍に濃縮する」と「7分
 の一の体積にする」の日本語は同じ意味なのか？
 の命題に類似してはいないか。AIに問い合わ
 せると、一方は同じ意味、他方は異なる意味と
 いう回答である。

左
 左は竜山江
 願主横山惣
 □
 □

右
 右かのえ



図-31

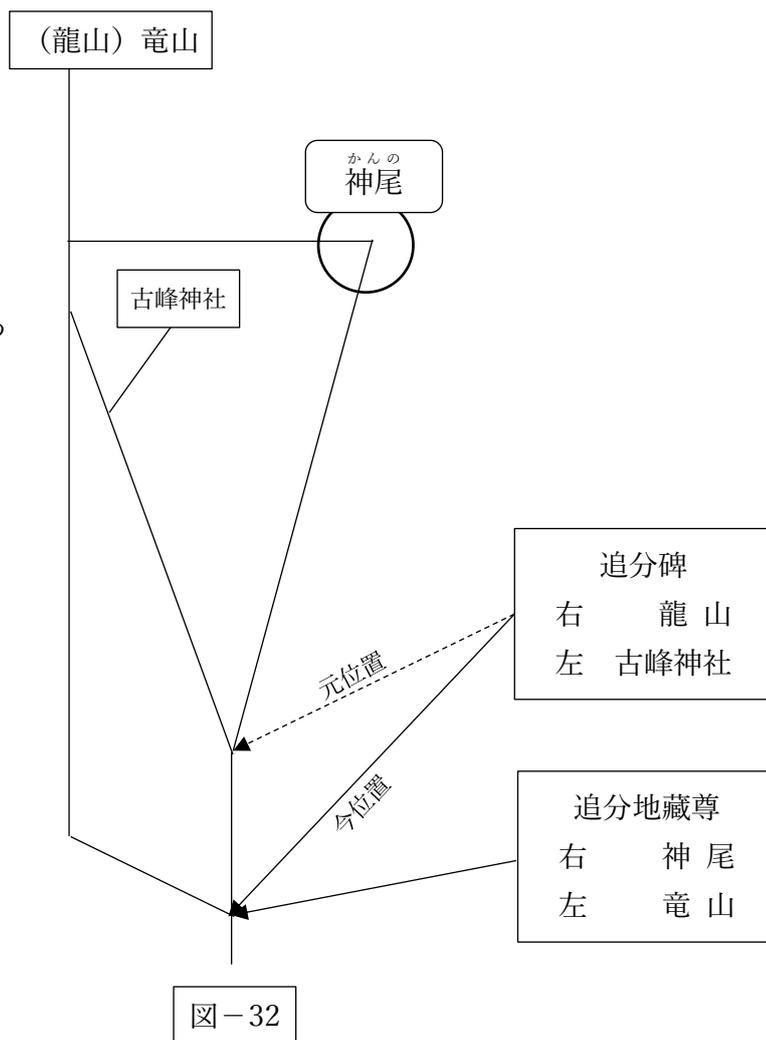


図-32